

福島では、甲状腺がんと診断される子供が増えています。東京電力福島第1原子力発電所の事故当時18歳以下だったすべての県民に甲状腺検査を実施しており、これまでに200人を超える小児甲状腺がんが発見されています。

この検査は、チェルノブイリ原発の事故後に、約7千人の子供に甲状腺がんが見つかったことから始まりました。

チェルノブイリでは、小児甲状腺がん以外には、小児、成人を問わず、いかなるがんの増加も確認されていません。

福島でもチェルノブイリと同じことが起きているという報道も見られますが、これは誤解です。県民健康調査検討委員会の評価部会も6月、「小

がん社会 を診る

中川 恵一



イラスト・中村 久美

増加ではなく「過剰診断」

また、甲状腺ホルモンの材料となるヨウ素は主に海草から摂取しますから、内陸にあるチェルノブイリの子供たちは、慢性的なヨウ素不足でした。その子供たちの目の前に、原発から放出された放射性ヨウ素が突然出現したのです。放射性であるうとなかろうと物質としての性質は変わりませんから、子供たちの甲状腺

0・2%にすぎません。福島の子供では99%が30μSv以下ですから、チェルノブイリと福島では、甲状腺の被曝量が桁違いに違います。

福島では、もともと子供たちが持っていた「無害な」甲状腺がんを、精密な検査によって発見しているにすぎません。いわゆる「過剰診断」です。がんが増加しているのではなく、「発見」が増えているのです。

今、韓国で同じようなことが起こっています。韓国で一番多いがんは甲状腺がん、女性のがんの4分の1を占めるにいたりました。過剰診断の問題を次回も取りあげます。

(東京大学病院准教授)

児甲状腺がんの多発と放射線被曝(ひばく)との関連は認められない」とする中間報告を公表しています。国際原子力機関や国連科学委員会なども同じ報告をしています。

チェルノブイリの場合、旧ソ連政府は事故を数日間、公表せず、食品の規制も遅れました。牧草に付着した放射性ヨウ素は牛乳に含まれま

に莫大な放射性ヨウ素が取り込まれてしまいました。就学前の子供の5%近くが甲状腺だけに限定して50000μSv以上被曝した一方、被曝量が50μSv以下はわずか